

平成21年度スーパーバイザー事業報告書

研究テーマ「しなやかな心もち、いのちを大切にする醇風っ子の育成」

鳥取市立醇風小学校

I はじめに

本校は、平成19・20年度、文部科学省の「道徳教育実践事業」の委嘱を受け道徳の時間の指導を「要」として、学校教育全体で道徳教育の充実を図ってきた。本年度には全国大会を開催し、全学級の道徳授業を公開し全体会や学年及び特別支援学級の分科会での研究発表も行った。その道徳教育研究における指導助言を国立教育政策所総括研究官である西野真由美先生に求め、研究を進めた。

II 研究の概要

児童の道徳性を育むため、「本校の課題」「子ども達の実態」「県小道研研究大会主題」の3つの視点から考えた。そこから見えてきたキーワード「感動」「つながり」「体験」を軸に研究に取り組み、地域社会とのネットワークづくりの推進や命の大切さを実感する心の育成をさらに充実させるようにした。

- 学校全体で取り組む道徳教育の充実を図る～道徳教育の推進体制等の充実～
- 一人一人の心を磨く、心に響く道徳授業の充実 ～感動～
- 諸活動や教科と道徳の時間の関連の工夫 ～体験～
- 家庭・地域社会との連携 ～つながり～

III 研究の内容

○道徳教育3部会

1 資料開発部の取組

- 一人一人の心を磨く心に響く道徳授業の充実

キーワード：感動

(1) 心に響く資料の選定及び開発

(2) 指導内容の重点化

- ・児童の実態をもとに、社会的な要請や今日的な課題を考慮し、重点的に指導したい内容項目を選択し、指導時間数を十分確保する。

^^・ねらいや資料の深まり図るため、主題配列の仕方を工夫する。

<スーパーバイザー西野先生指導>

① 児童の実態を大切に

- ・指導案を立案するとき大切なものは、児童の実態である。子どもの姿を見て、見えてくるものを探る。何ができていて何ができていないか。担任の育てたい力は何か。その力を育てるためにはどんな指導が必要か。子どもに、こうなってほしいという願いを教師は持っているか。子どもへのメッセージのある授業を創ってほしい。

② 教師の願いを重点化しよう

- ・道徳授業をしようとするとき、資料の分析が先行しがち



授業は子どもと創る

子どもの実態を大切に

- ・何ができていて 何ができていないか
- ・担任の育てたい力は何か
- ・その力を育てるためには何が必要か
- ・こうなってほしいという願いはあるか
- ・メッセージのある授業をしよう

子どもの発達段階にあった授業スタイルを工夫しよう

小学校
低学年・・・一緒に話す楽しさを
中学年・・・よさへの憧れを
高学年・・・答えより問いの発見を
中学校
問いを共同で探求する喜びを

であるが目の前にいる子どもをよく見て、授業を創ること。子どもにとって資料がどんな意味があるか考える。子どもの実態と内容項目を関連づけ、それらを結びつけるのが教師の願いである。ねらいとする価値と子どもの実態により、道徳的心情を養うことなのか道徳的判断力なのか実践の意欲づけなのかは、学級によって決まる。

③ 友達と学んでいるとき話し合っているとき心は育つ

- ・ 心が育つのは、友達と共に学んでいるとき、話し合っているときである。「分かりやすい授業」を心がけるだけでは子どもの学ぶ意欲は育たない。「分かる学ぶ意欲」は仲のよい友達と一緒に学ぶ時に生まれる。人と関わる力、コミュニケーション力が人の学びを支えている。

④ 書くことよりも話し合い

- ・ 「紙に書かないと発言できない」という理由で書かせていると、いつまで経っても発言できない。書いて発言させると、書いたことしか言えなくなる。それでは相手と話しながら考えを深めていくことができない。考えがまとまらなくても発言意欲を持って話し始めることが大切。教師が適切な言葉かけで励まし、質問したりして、話すことを訓練する。もちろん、深く考えさせた上で発言させたいなら、きちんと書かせることも大切である。

⑤ 子どもが考えたくなるような発問の工夫

- ・ 教師は、「子どもからねらいとする発言をどう引き出すか。そのための発問は？」と考えがちだ。子どもがねらいに関わる発言をしてくれる魔法のような発問を求めてしまう。そうではなく、「どんな問いをすれば、話し合いが活発になるだろうか」と考える。答えが一つに決まらないような発問をつくること。
- ・ 子どもは、正解を言わなければならないというプレッシャーがある。
- ・ 子どもには教科の授業と道徳の授業との違いはわからない。教科の授業と同様に、教師は正解を求めているのではないかと思っている。教師は何を言ってもいいと言うけど、子どもはそう思っていない。間違っただけを言ってみんなに笑われることを子どもは恐れている。
- ・ 子どもは、正解をいうのに慣れている。「分からない」とは言えない。先生は答えを聞いていると思う。正解に自信のない子どもは、言わなくなる。
- ・ 「こんなことを言っても先生には取り上げてもらえない」と思ったら、言わなくなる。約束事として思ったことを話すこと、みんなの意見を

3 友達と共に学んでいるとき話し合っているとき心は育つ



友達と話すことで学ぶ意欲が育つ

書くよりも話し合い

- ・ 道徳の時間は色々な話ができる時間
- 友達の意見を聞きたい
- △ 書いていると時間ももたない
- △ 書いたことしか言えない
- よく分からなくていいから発言してみよう




アドバイスをしよう

- ・ 悩んでいる人に相談されるとその人の立場に立って考えようとする
- ・ 「松岡さんはどうしたでしょう」ではなく、「どうしたらよいかアドバイスしてあげて」と問う
- ・ 松岡さんがどういう人で 何を大切にしているか どうするのがよいかを真剣に考える
- ・ 気持ちに共感し考えていると「他人の立場になって考える」ことができるようになる

教師の願いを伝えることを恐れない

- ◎ 「よい授業」とは 教師の願いが言葉になって はっきりと伝わってくる授業
- ◎ 子どもにとってもよくわかる授業
- ◎ メッセージのある授業を創ろう



聞いて大事にしていきたいという思いを教師が話すことが大切。自分の意見を聞いてもらえる時間だと、安心感を持たせること。

⑥ 教師の願いを伝えることを恐れない

- ・ 「価値の押しつけはよくない。ちょっといい話で締めくくろう」と教師は考えがちだが、指導が必要な場面でメッセージを出さないのはよくない。きちんと「それは間違っていないか。」「弱い者いじめはやめよう。」と伝えたい。子どもはちゃんと受け止めてくれる。大切なのは、メッセージがある授業である。ねらいを隠して黙っているよりも、先生はこう思うと言う。先生が思いを出すから子どもも「でもね、ぼくはこう思うよ。」と本音を語るようになる。

⑦ 人の生き方に学ぶ

- ・ 「どうして英世は、寝る時間を短くしてまであんなに一生懸命勉強したか分からない」と子どもが言ったとき、その考えを深めるべきであった。子どもが疑問を持ちながら学習することは、大変すばらしいことである。資料中の人物のことを身近に考えて学習している。

⑧ その他の指導について

- ・ 授業で児童を指名するとき、「あなたの意見が聞きたい」という気持ちで聞いていくこと。「あの子だったら、まとめてくれるだろう」と当てないこと。教師が期待していることを発言する子どもをつくらないようにすることは大事である。
- ・ 「深めよう」「一つの視点にまとめよう」と考えすぎないで、子どもと一緒に授業を創っていこう。

2 体験交流部の取組

● 諸活動や教科と道徳の時間の関連の工夫
キーワード：体験

(1) 研究課題にそった教科等との関連的構想による指導

- ・ 道徳の時間と各教科・領域の学習と日常生活を関連づけた計画を立て、全教育活動と道徳の時間とを有機的に結ぶ。
- ・ 体験したことを話し合ったり書き記したりして、思いを持つ。

(2) 豊かな体験を生かした授業づくりの工夫

- ・ 発達段階を考慮し創意工夫ある指導を行う。
- ・ 体験活動の中で感じたことや考えたことを生かす指導をする。

〈スーパーバイザー西野先生指導〉

① 教師の願いを重点化しよう


- ・ 教師は願いを持ちどの内容項目についても学習を

人の「生き方」に学ぶ
 将来の目標に向かって
 医学の道に進みたい 野口英世



どうして寝る時間を短くしてまで頑張らないといけないか分からない

○人の生き方に関心を持たせるための読み聞かせ
 ○子どもの意識をつなげるための手だて

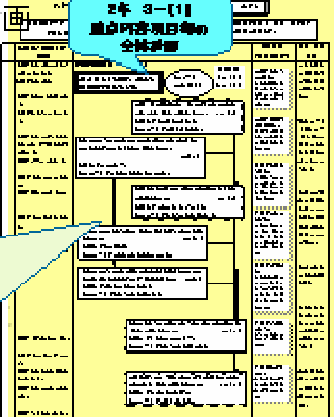


あなたの意見を聞かせて

△この子なら正解を言ってくれるだろうと言う気持ちは子どもに伝わる
 △教師が期待していることを発言する子どもを作らないこと

道徳教育全体計画

2年 3-【1】
 道徳内容項目毎の
 全体計画



・ 纏でつないだところは、子どもの意識をつなぐこと
 ・ 教師は意識して日常とつなげること
 ・ 振り返らせる活動をする

なぜ振り返りの活動が必要か

- 1 体験を言葉に表現することで、自分の大切な「経験」になる
- 2 体験を話し合うことで、新しい発見、違う見方との出会いがある

お互いの体験と思いを共有することで、
 学級の共同性を育みます。
 体験を話し合っ、学級を子どもたちの
 〈つながりの場〉にしましょう。

行うが、平均的に扱うのではなく、重点化していくこと。

- ・ 道徳教育における学級のねらいを作るときは、継続的に指導でき、日常とつないでいくことができるものにする。
- ・ 子どもは意識をつなぐ力は弱いので、教師が日常や諸活動と道徳の時間をつないでいくこと。
- ・ 子どもの態度が、大人目から見るとうそをついているように見えたり、全然教師が言ったことを聞いていなかったりすることもある。重点化して子どもを見取ることが大切である。

② 子どもは今を全力で生きる

- ・ 授業では、よいことを言うがすぐに実践にはつながらない。教師は嘆くが、子どもにとっては普通のことである。どんなによい授業をしても子どもは忘れてしまう。「授業でやったでしょう」言われれば思い出す。授業で学習していれば、「あの時、何て言っていたかな。」と思い出させてあげられる。道徳の授業を行わなければ、子どもは思い出すこともない。日常の指導を生かすことも道徳の授業をやればこそできる。

③ 瞬間をとらえよう

- ・ 展開後段にまとめの時間を作ろうと考えなくてよい。「やった。」とみんな喜び合った瞬間があった。あれがよい。一緒に喜ぶことが、心にたまる。最後の振り返りで子どもの発言が何もでなかったのは、子どもはもう満足していたのである。大きなカブが抜けて、喜んだ瞬間に思いを言わせればよかった。

3 家庭地域社会連携部の取組

●家庭・地域社会との連携

キーワード：つながり

(1) 家庭・地域社会とのつながりの工夫

○家庭とのつながりの工夫

- ・ 保護者の参加、保護者からの手紙の活用
- ・ 心のノートや道徳ノートの活用
- ・ 学校日より、学級だよりの発行

○地域社会とのつながりの工夫

- ・ 学校だよりの発行
- ・ 地域の方々の協力
- ・ 積極的な取材活動
- ・ 地域の行事へ参加

(2) 「こころの先生」の積極的な活用

- ・ 交流し、自己の生き方への考えを深める。
- ・ 一度きりではなく、多時間の交流を行う。

<スーパーバイザー西野先生指導>

子どもと一緒に学んでいこう

- ・ 地域に住んでいるのは子どもなので、共に地域について学んでいきたいという姿勢で指導すること。全体計画は1年間を見通したものを立てる。郷土について考え、郷土を愛する気持ちが高まるように構成すること。
- ・ 何人かの子どもの発言の中に『思い出』が出てきた。子どもの心に残った言葉である。展開

子どもは今を全力で生きる

子どもは授業が終われば忘れる



「授業でやったでしょう」
と言われれば思い出す

繰り返し道徳学習をしよう

瞬間をとらえよう

特別支援学級の授業より



「やった」と喜び合うこと
一緒に喜ぶことが心にたまる

まともに何もでなかった
かぶが抜けて
喜んだ瞬間に言わせる

子どもと一緒に学んでいこう



ふるさとを愛する心
徳べえ様

校区に住んでいるのは子ども
子どもと一緒に学んでいこう
全体計画
1年間を見通して 郷土について考え 意識が高まるように構成すること

後段の発問は、この言葉を使うのがよい。

- ・ 教師は「鳥取で大切にしていきたいところはどこですか。」と発問したが抽象的で答えにくい。「みんなの鳥取で大事にしたい思い出は何ですか」「どうしてですか」と深めていく。そうすれば、必ず「人」に導くことができる。
- ・ 人が見えない郷土資料はよくない。調べ学習ができる資料や人物がよい。

IV スーパーバイザーの役割

- ・ 「子どもと創る 子どもを大事に 子どもの声を大事に聞く これができると道徳授業がおもしろくなるし、楽しくなる」と言われ続けた。大切な助言であった。道徳の授業を見て頂くと何が良いことで、何が欠けているのか確に教えてくださった。それは、指導者の道徳授業の指導技術に関わるものもあったが、多くは、自らの教育観を再確認しなければならない助言であった。大所高所からの指導で、単に道徳授業だけを見直すだけではなく学級経営も自らの生き方も見直すようになった。
- ・ 指導助言を頂いた言葉をまとめると右記の表になる。それらは、道徳の時間の指導に欠かせないものであると共に、子どもの心を見て育てるという意味で、道徳の時間の指導を越えた「心の教育を根本に立ち返って考える」教師の姿そのものであったと思う。実践を通して具体的に指導して頂くことができた。
- ・ 研究者と実践者が共に研究を深めていくことが学習指導要領に基づいた授業を創っていくことになると思う。双方の思いを集積するところに求める授業の姿があり、研究者としての西野先生の助言は示唆に富んでいた。

V 研究のまとめ

○成果と課題

(1) 成果

○学校全体で取り組む道徳教育

道徳教育を全教育活動で取り組む指導体制ができ、全職員で取り組めた。学習指導要領改訂の時期に、時代の要請に添った指導を頂いた。感動、体験、つながりを研究の柱にして取り組んだが、多岐に渡る研究内容を教師の個性を生かすためにはその方がよいと助言をいただいた。そのことで、職員同士も学び合え、学校のきまりを守る態度の育成や学級経営の中で道徳性を育む姿勢をもつこと等、道徳教育の土台についても共通理解することができ、その上で、道徳の時間の研究が推進できた。


○校訓「至誠」の心を活かした学校づくり

他者との人間関係に目を向ける「醇風五心」を再確認し、具体的な行動の姿を示した「醇風しぐさ」を選定したことは、相手の立場の理解と支え合い、集団の一員としての自覚や責任などに関する多様な体験を生活の中で意識する機会になっており、新たな校風の創造につながっている。

○全体計画の作成

「指導内容の重点化」、「関連的構想による指導」、「豊かな体験を生かす」等を反映させた全体計画が作成できた。これは、教科等に道徳の内容を重ねていたり、道徳の時間を具体的な各


鳥取で大切にしていきたいところはどこですか？



キーワード「思い出」
「みんなの鳥取で大事にしたい思い出は何？」
どうすれば 必ず「人」に導ける

3. 4年生は「人」が見えない資料は向かない
人の生き方に触れさせること

心に残った言葉



- 1 子どもの実態を大切に
- 2 教師の願いを重点化しよう
- 3 友達と学んでいるとき話し合っているとき心は育つ
- 4 子どもが考えたいくなるような発問の工夫
- 5 教師の願いを伝えることを恐れない
- 6 子どもは今を全力で生きる
- 7 子どもと一緒に学んでいこう
- 8 瞬間をとらえよう
- 9 人の「生き方」に学ぶ
- 10 本物と出会わせる

教科等の学習に重ねて考えたりし、生活や学習に生きて働く道徳の時間をイメージすることができるようになった。全体計画を作成することにおいても、助言を生かして作成することができた。

○道徳の時間アンケート

昨年度に引き続き行ったアンケートからは次のような実態が見られる。道徳の時間が好きな児童は、全学年を通して8割を越え、大きな変化はない。記述から分かることは、道徳の時間が考える時間になっており「人として大切なことが学べる。心が落ち着く。生き方が考えられる」と書いている。また友達の違いが聞けることが好きな理由であり、本音で話し合うことを今後も大切にしていきたい。

(2) 課題

○研究組織について

子どもの姿から研究が検証できるよう、一人年間2～3回の道徳授業研究会を行ったので、研究課題の共通理解が図られたが、多岐に渡る課題を実践できたとは言いがたい。その課題は何か、今後研究課題から問題点を出し、研究構想図をもとに実践を改善しながらさらに研究を深めていきたい。

○道徳の時間の指導（表現力の育成）

教師が児童の発言を切り返して深めることが多く、子どもが主体となる話し合いによって道徳的価値の自覚を図ることが不十分である。思いを持っていても、言葉によって充分表現できない児童もいる。何でも言い合える学級をつくることを第一に考えると共に、道徳的価値の練り上げができるよう表現力をつけていきたい。

○道徳の時間アンケート

「自分の考えたことが答えだから、答えがないから道徳の時間は好きである」と答えている児童がいた。道徳の時間に正解はないが自己の生き方を探求することが大切である。自分の思いを持つことは認めながらも、よりよい生き方を求めて「正解は一つではない」「よりよい生き方を学級で考えていこう」と自己の生き方について考えを深める道徳授業を今後、目指していくことが肝要であることが分かった。

VI おわりに

道徳教育を核とした教育活動に全員が力と心を合わせて取り組んだ。生活習慣や仲間関係等の面のわずかな成長を喜びながら、全教育活動との太いつながりによる校訓「至誠」の心の育成をめざしている。今後、日常の諸活動や学校行事等を道徳実践の場とし、道徳性を育てていきたい。また、「こんな子どもになりたい」という子どもの願いと「こんな子どもに育ててほしい」という教師のメッセージを持ち西野先生がいつも言われていた「子どもを信じて」との言葉を胸に道徳教育に今後も力を尽くしていきたい。

